

泡沫の園 —Paradise
lost—

くけい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全三話。

「早苗、朝ご飯できたわよ」 霊夢さんの声。朝、私——東風谷早苗はその声で目覚める。一つ屋根の下で暮らす私と霊夢さんの日常は、夏祭りの日に瓦解する。

第一話・除、第二話・派。第三話・求（終わる幻想郷—Last Word—のサイドストーリー）。

第二話は、終わる幻想郷—Last Word—二十九話の投稿時に同時投稿。

第三話は、終わる幻想郷—Last Word—最終話と同時に投稿予定。

目次

【除—ジヨ—】	1
【派—ハ—】	9
【求—キユウ—】	20

【除—ジヨ—】

【除】

- ① とりのぞく。
- ② 古いものをのぞいて新しいものを迎える。
- ③ わり算。

明鏡国語辞典 第二版



透明な金魚袋の中で泳ぐ二匹の金魚。

赤い紐で口を縛ったその袋の中でゆったりと泳いでいる。
光りを反射しきらきらと揺れる。

紅白の金魚と真つ白な金魚。

遠くから歌が聞こえる。

君さえいれば、他は何もいらぬ——

良くあるラブソングの、良くある歌詞。

二匹の金魚が恋人同士なら——

この金魚袋は、二匹にとって楽園なのだろうか？



透明な金魚袋の中で泳ぐ二匹の金魚。

赤い紐で口を縛ったその袋の中でゆったりと泳いでいる。

光りを反射しきらきらと揺れる。

紅白の金魚と真つ白な金魚。

遠くから歌が聞こえる。

君さえいれば、他は何もいらぬ——

良くあるラブソングの、良くある歌詞。

二匹の金魚が恋人同士なら——

この金魚袋は、二匹にとって楽園なのだろうか？



「……」

「……え」

声が聞こえる。

少女の声。

「早苗、朝ご飯できたわよ」

霊夢さんのその声。

ゆさゆさと揺り動かされる私の体。

「お早う……ございませす」

私は重たい瞼を少し開け、定型文的な挨拶を零す。

呼び起こす少女の姿は朧気で、はっきりと見えない。

「返事は良いから、体を起こしなさい」

「はあい」

朝は苦手な方ではないけれど、体が重い。瞼を擦り、体を起こす。「んんー」と両手を挙げ、体を伸ばした。

横を見ると、霊夢さんが寝ていた布団はいつものように折りたたまれている。更にその先には、古めかしい丸いちゃぶ台と座布団が置かれ、その上には朝食が並んでいる。

布団は部屋の奥に敷かれ、テーブルは部屋の対角に置かれている。縁側へと続く襖は開け放たれ、鮮やかな朝日が部屋を照らしていた。

無精ながら四つん這いで歩き、紅色の座布団に座った。

ご飯に、油揚げと長ネギの味噌汁、きゅうりの漬け物に卵焼き。霊夢さんは私を待たずに食べ始めていた。

服も着替えており、いつもの二色の巫女服を着て、耳飾り、大きなリボンで髪を留めている。

「いただきます」

手を合わせ、箸を手に取り、卵焼きを一口サイズに割って、口に運ぶ。

「今日は、仕事が少ないから三時ごろに帰れると思うわ」

食事をしながら、今日の予定を伝える。こちらは、変わらず家の掃除、洗濯などの家事だ。

「帰りに、魚でも買ってくるから」

いつも通り夕食のおかずは霊夢さんが買ってきてくれる。焼き魚にするか、煮魚にするかあるいは――

帰りが早いのであれば、そのとき決めればいい。と言うか、いつもそれだ。

先に食べ終えた霊夢さんが、お茶を用意し、朝食を平らげて、熱いお茶をゆつくりと飲んだ。

食事が終わると、食器をお盆に載せ、台所のシンクにある水を張った桶に浸けておく。

すぐに食器を洗わず、私は着替えを先に済ませる。霊夢さんとは型は違うが、同じツートーンの巫女服に着替え、髪留めをつける。

私は白いエプロンをつけ、食器を洗う。

洗い終わった時には、霊夢さんはお茶を飲み終え仕事に出る準備をしていた。

「それじゃあ、行ってくるわね」

「はい。気をつけて」

宙へと舞う霊夢さんを、鳥居の前まで見送り、私は家事を行う。

まずは、洗濯。寝間着、巫女服、下着を水の張った深めの桶に入れ、洗濯洗剤を投入する。大幣をふり、桶の中で水流を作る。

しばらくして、洗濯物を取り出し、泡だらけの水を入れ替え、すぎと脱水を行う。今日も天気が良いので、神社裏手にある物干し竿に洗濯物を掛けた。一緒に布団も干しておく。

洗濯が終わると、境内の掃除を行う。

今の季節は落ち葉も少ないので、石造りの参道の上の砂埃を払う程度だった。

「早苗さん、お早う御座います」

箒で掃いていると、鳥居の方から本居小鈴さんの元気な声が聞こえた。「お早う御座

います」と私は挨拶を交わす。

小鈴と一緒に歩いてくる稗田阿求さんが、遅れて小さな声で「お早う御座います」と会釈をした。

神社には毎日ではないが、参拝客が訪れる。顔ぶれは今の二人の他に、豊聡耳神子さんに物部布都さん。あとは聖白蓮さんといった感じ。

二人が参拝を終えると、いつも通り世間話をする。

夏の強い日差しもあつて、縁側に案内し、お茶とせんべいを出した。

「明日の夏祭り、霊夢さんと一緒にまわりませんか」

小さな口を大きく開けてせんべいを食べる小鈴さんに対し、阿求さんはリスのように少しずつ囁っている。

「早苗さんはこちらのお祭りは初めですし」

そうだったのだろうか？ それとも外でのお祭りと同様にしてしまっているのか？ 今日の朝、霊夢さんも同じようなことを言っていた。

祭りは霊夢さんと一緒に行く予定だ。

皆で言った方が楽しいだろう。私は約束し、一時間ほどおしゃべりをし、二人は里へと帰っていった。

表の掃除の続きを終えた頃には昼頃で、私は簡単に昼食を済ませた。

外から涼やかな風が流れ込む。

柔らかな風。

チリンチリンと軒先に吊った風鈴が涼やかな音を立てる。

お腹が満たされたこと、肌を、髪を撫でるそよ風が気持ち良く、いつの間にか私は寝てしまった。

「ちよつと人が仕事をしてきたのに、あんたは居眠り？」

頭を小突かれ、ちゃぶ台から重い頭を起こす。瞼が重い。

「ふあれ、早かったんですね」

「明日の祭りの準備があるらしくてね。早苗、よだれ」

「ふえ？」

慌てて、私は口元を拭う。

「霊夢さん、今日本居小鈴さんと阿求さんが訪ねられて……」

覚醒した私は夏祭りの約束を伝えた。

「別にいいわよ」

予想通りの返事が帰ってくる。

「それと……はい、お土産」

突き出された籠を覗き込む。歪な氷をかき分けると二匹の鮎が入っていた。

「鮎ですか」

「どう料理するかは早苗に任せるわ」

後はいつも通りだった。洗濯物を取り込むのを手伝って貰い、夕暮れ時までお茶を、菓子を掴み、まったりと二人で過ごす。

日が暮れ始めると私は夕食を作る。ご飯を炊き、味噌汁を作り、鮎は塩焼きにすることにした。

作った夕食を二人で食べ、片付けて、風呂に入る。

艶めく髪を乾かし、私達はいつもと同じように床に就いた。

【派——ハ——】

【派】

- 一 流儀・思想・主義などを同じくする人々の集まり。
- 二 ①もとから分かれ出る。
- ②一部を分けてさしつかわす。

明鏡国語辞典 第二版



「早苗、朝ご飯できたわよ。」

霊夢さんの声。変わらない、いつもの声。

ゆさゆさと揺り動かされる私の体。

今日はお祭りの日。

しかし、私はいつものように霊夢さんに起こされる。

朝食を食べて、いつもの服に着替え、境内の掃除をする。

そして、神社を出発し、霊夢さんとともに町に向かつて西へと飛んだ。

「小鈴ちゃんの家集合だったっけ？」と、霊夢。

「はい、阿求さんともそこで落ち合う予定ですよ」と、私が返す。

喋りながら、大空を飛ぶ。

町のあちこちに大小様々な白い霧がうっすらと立ちこめていた。

いや、それだけではない。森も北の山も全て、薄い霧がかかっているようで、くつきりとした輪郭などは拾えない。

ゆつくりと地上に降り、小さな白い粒子が混じつていそうな茶色い地面に足をつける。

私達は扉に囲まれた町には、東門から入る。

門の先は東西に延びる大通り。

すでに多くの人で賑わっていた。

いかにもお祭りといった音楽が流れている。

うっすらと白い靄を感じる町並みに紅白の提灯がずらつと並んでいる。まだ明るいということで、提灯の火は灯っていないかった。

少し歩くと、商業施設が立ち並び、所々に屋台が並ぶ。

また、あちこちに木製の長椅子と簡素なテーブルが置かれていた。

休憩や食事の時に使うのだろう。

セール品がでかかどと割引率とその値段が書かれた札と共に並べられている。

私達はまずは鈴奈庵——貸本屋に向かう。

いつもとは違い、貸本屋の前には張り紙がされている。

内容は、今夜八時から怪談話をする百物語を開催するというイベント案内。そして、

語りの人の名前が書かれていた。

「こんにちは、霊夢さん。早苗さん」と、小鈴の声。

中に入ると、すでに阿求さんは来ており小鈴さんと談笑していた。

小鈴さんはいつもと同じ市松模様で、エプロンを外しているだけ。

対して阿求さんは、着物の色自体はいつもと同じだが、有職文様があしらわれている。

豪華な作りだ。

四人揃ったところで、祭りを見て回る。

「早苗さんはこのお祭りが初めてですし、色々説明してあげますね」

小鈴さんは私に微笑む。

「そういえば、あんたはこっちはあんまり来てなかったけ？」と、霊夢さんが私を見る。

「え？ ええ、まあ……」

言葉を濁す。

そんな事はない。

しかし、三人の中では知識は無いだろうから、間違つてはいないだろう。

「先に何か食べませんか？ 正午を過ぎると食べ物屋凄く込むですよ」と小鈴さんが言う。

「早苗、それでもいい？」

小鈴さんの言葉を聞き、霊夢さんは私に尋ねる。

「はい」

まずは腹拵えと、私達は屋台をいくつか見て回る。

すでにいくつかは列が出来ていた。

うどん、焼きそば、丼もの、焼きトウモロコシなどなど。

私達は一番空いている焼きそばを買うことに決めた。

私と霊夢さんで焼きそばを、小鈴さんと阿求さんは飲み物をそれぞれ買うために一時的に別れる。

買い終えると屋台の側にある長椅子に二人並んで座り、二人を待つ。

そう待たずに二人は戻ってくる。

「お好きな方を選んでください」と、小鈴さんがグラスを差し出した。

二人が買ってきたのは冷えた甘酒と梅のジュース。

私は梅のジュースを選ぶ。霊夢さんは甘酒。

こちらが買った焼きそばを二人に渡し、焼きそばを食べる。

ソースの香りが香ばしい。

阿求さんは少しずつ口に運び、小鈴さんと霊夢さんは割と口を大きく開け、豪快な感じで食べている。

「あのお店のお兄さんは……」と、小鈴さんは食べながら、この町の情報を教えてくれる。

どこか聞き覚えのある話——

私は相づちを打ちながら、焼きそばを食べる。

時折付け足すように阿求さんが喋り、時折霊夢さんも知らないこともあるらしく感嘆な声を上げる。

「霊夢さんも知らなかったんですか？」

「そりゃあ渡しだつて知らないこともあるわ。ここに住んでいない訳だし、ね」
焼きそばの油のせいだろうか。

霊夢さんの唇は、リップグロスを塗ったかのように艶やかだ。

それは、蠱惑的で、艶めかしい。

「なによ。何か、私の顔に付いてる？」

「あつあつ、いいいい」

「――変なの」

焼きそばを食べ終わった霊夢さんは、ナプキンで口を拭った。

柔らかな唇が揺れた。

梅のジュースを一口飲む。

柔らかな甘みと酸味が口に広がる。

おしゃべりをしながら、阿求さんが食べ終わるのを待つ。

正午を告げる放送が、そして、まもなく秦ところによる能の演目が始まるというアナウンスが流れた。

阿求さんが食べ終え、放送の能を見に行く事に。

皿とコップを店に返却し、小鈴さんを先頭に会場に向かった。

南北に大きく伸びる通りと交差する場所に高さ五メートルほどの櫓が建っている。

その上ではピンク色の長髪を靡かせ、秦ところが能を舞っていた。

既視感のある秦ところの舞踊。

櫓の下で大人達が演奏する音楽に合わせて、面霊気が舞い踊る。

能の演目が終了すると、拍手。そして、今度は子供たちの演奏会。

寺小屋の先生の一人――上白沢慧音先生の挨拶があり、演奏が始まる。

曲名も知らないが、聞き覚えのあるどこかノスタルジックなメロディー。

演奏が終わり、拍手と挨拶、それらが終わる頃には午後二時を少し過ぎていた。

この後はのど自慢大会だそうで、あまり興味の無い私達四人は色々な店を見て回る。陶器のお店で食器を見たり、呉服屋で服を見たり、ストレートの長髪に髪飾りをあててみたり——四時すぎだろうか、休憩がてらにかき氷を買う。

種類はイチゴ、ゆず、夏みかんの三種類のシロップ。宇治金時、変わったものだと、みぞれに砕いた色とりどりの琥珀糖をまぶしたカラフルなかき氷がある。

阿求さんは宇治金時を、小鈴さんと霊夢さんはイチゴ、私は夏みかんを注文した。

それぞれのトッピングに小豆、小さくスライスされたイチゴ、夏みかのがのっている。それを、ほとんど食べ終わつた時、「林檎飴って凄く食べずらいんですよね」と、小鈴さんがサクサクと氷の山を崩しながら呟いた。

かき氷屋のすぐ隣で林檎飴を売っていたからだろう。

「同感。大きいのはいいんだけど、人前でかじりつくつていうのはね——」

霊夢さんの呟きに、阿求さんも頷いている。

「それなら、食べ方を変えれば良いんですよ」

「食べ方？」

「うーん、説明するより……ちよつと聞いてきますね」

私は一人、店の方に向かう。

まずはかき氷屋で、包丁とまな板と器を少し借りられないかと尋ねる。

店主に了解をもらうと、今度は林檎飴を四つ購入する。

それぞれの店主が見る中、飴の包装を取り、それをまな板の上に置き、包丁を入れる。コーティングされた飴の層はそれほど厚くはなかったので、非力な私の力でも切るこ
とが出来た。

一個の林檎飴を小さな四つのブロックに切り分け、器に盛る。

その様子に感心している林檎飴の店主に、「こんな風に小さくすると、女性は食べやすいんですよ」と、説明した。

店主はこれから試してみるよと言い、フォークを四本貸してくれた。

私は三人の元へ戻る。

三人もこういう食べ方は初めてらしく驚いていた。

林檎の果肉にフォークを差し、一口囓る。

林檎の酸味と、パリパリとした飴の食感と甘さが口に広がる。

すでにかき氷を食べ終えた、四人はあつという間に器の林檎を食べ終えてしまった。

器を店に返し、

輪投げ、金魚すくい、吹き矢の射的、駒回しなどのゲーム。そして、空中にシャボン玉が舞っている。

空に舞う虹色に光る球体は、音もなく、弾けて、消える。

私達は金魚すくいをすることにした。

左手に腕を、右手に和紙を貼った輪っかを持つ。

涼しげに泳ぐ紅白模様の金魚を輪っかを水面と並行にして、そつとすくい上げようとする。

しかし、金魚は勢いよく跳ね、紙を破つて逃げてしまう。

再度、お金を払い同じような模様の金魚を狙うもやっぱり紙を破つて逃げられてしまった。

霊夢さんも腕をまくつて、挑戦する。

阿求さんは、小鈴さんの指さす金魚を狙っている。

霊夢さんは泳ぐ黒の金魚に狙いを絞る。

すくい取るように金魚は紙の上に乗る、吸い込まれるように腕に入っていく。
「まず一匹」

今度は紅白の金魚を狙い、一匹目と同じようにすくい取った。

三匹目の狙いは少し小さな白い金魚。

水面からすくい取るように動かすも腕に流れる前に紙が破れて逃げてしまった。

「二匹か。まあこんなものかしら」

霊夢さんは腕を店主に渡し、捕った金魚の入った透明な袋を受け取った。観察するように袋を顔の前にかざす。

紅白の金魚と黒い金魚。仲良く泳いでいる。

歌声が聞こえた。

よくあるラブソング。

泳ぐ金魚を見ながら——

「もしこの金魚たちが恋人同士なら、この中は二人にとって楽園なんではないか？」

聞こえる歌の歌詞のせいかな、私は何ともなしに呟いた。

「……早苗……」ため息が聞こえた。「……何しんみりしてんの。そんなわけないでしょ。二人だけなんて退屈でしょう。それに——」

大通りに方を見やる彼女。

「こんな景色は見れないでしょ」

どこか遠い目で——

「二人だけなんて、寂しい——」

「私も欲しいいー」

近くで同じように金魚すくいをしていた少女の声にかき消され、聞き取れない。

だけど、その言葉に不安がよぎる。

祭りは後半にさしかかっていた。

【求—キュウ—】

【求】

もとめる。ほしがる。

明鏡国語辞典 第二版



家、もとい神社に戻ると私はお風呂の準備を始める。

部屋に戻ると、霊夢さんは縁側に座っていた。

「部屋に入らないんですか？」

「こつちの方が花火の音が聞こえるのよ」

「見なくてもいいんですか？」

「別に、そういう華やかなモノは別の所で沢山見ているし……」

そう言っていると花火の音が微かに聞こえた。

「始まったみたい」

黙って花火の音を聞く。霊夢さんの表情はいつになくおとなしきを感じさせた。長くはない花火が止む。

私は風呂場の様子を見に行く。お湯はちょうどいい高さまで、湯を張っていた。霊夢さんに声をかけ、いつものように先に入ってもらおう。

歯磨きをし、丸テーブルを動かす。二人分の布団を敷く。自分の寝巻きを用意する。掛け布団の上に座り、物思いにふける。

終わり。

その予感。原因は霊夢さんの言葉。

終わり。

それが、自分にとってどういう事なのか分からない。

……

「早苗、上がったわよ」

いつの間にか、開いていた襖。白い浴衣を着た上気した霊夢さんが立っていた。頭には白いタオル載せていて、まるで降り積もった雪を被っているようだった。

私は返事をし、着替えを持って風呂場へと向かう。

服を脱ぎ、体を洗い、湯船につかる。

お湯につかっているのに、その温かさがあまり感じられない。

不安のせいだ。

汗を、その不安を洗い流すように体を洗ったのに——
ちやぶつと鼻下まで湯につかる。

それでも、温かさは変わらなかった。

風呂から出ると、いつものように布団の上で座っている。髪の水分会をふき取るタオルを首に巻き、団扇を扇いで黒髪を乾かしている。

こちらに気付く。

「早苗、どうしたの？ 気分でも悪いの？」

こちらを心配する声。

「霊夢さん」

私は霊夢さんの前に腰を下ろし、顔をぐっと近づける。

「早苗？」

当惑する表情。

湿り気を帯びた長い黒髪。

上気した肌。

頬を両手で包み、柔らかな唇にくちづける。

温かい、柔らかな感触。

お互いに歯磨きはしているのに、そのキスは祭りの香りがした。

抵抗はなかった。

少し息苦しくなり、唇を離す。

霊夢の頬はほんのりと赤い。

頬から手を離し、肩に触れ、押し倒す。

「やいよえ」

唾液で濡れた唇から、日常では聞くことのない弱弱しい声が漏れる。

私は霊夢の体を押し倒す。

黒髪は妖艶に乱れ——

肩から手を離し、白い浴衣で包まれた二つの膨らみに手を這わす。

薄い生地越しに伝わる火照った体の熱と、肉の柔らかさ。

自分でも信じられないほど、積極的に霊夢の体を求める。

「っん」

白く細い首を伝って漏れる甘い声。

胸肌を、少女の膨らみを暴こうと、浴衣に手を掛ける。

少し乱暴に、ぐっと左右に引っ張り、そして——

「ッ——」

私は悲鳴を上げた。

「早苗？」

熱っぽい声はいつもの声に変わる。

私は両手で顔を覆った。

はだけた浴衣の中には何もなかった。

正確には、白い霧が、詰まっていた。

町のあちこちに発生していた霧が——

「早苗、どうしたの？」 早苗

ここにきて、私は思い出す。

ここは——

この世界は——

「早苗、ねえ？」 早苗

この世界は私が創り出した。

青いリボン、青い耳飾りをした霊夢さんは、唐突に私の前から姿を消した。

そして、赤いリボン、赤い耳飾りをした霊夢さんは長い昏睡状態の末、目を覚ます。

私は喜び、たくさん色々な話をした。

けれど、そこに違和感があった。霊夢さんと同じはずの半身とどこか違う。同じ目、鼻、口、顔の輪郭、髪、匂い。

その違和感は強くなっていく。

同時に、彼女と話がしたいと思うようになった。

けど、彼女はもういない。

しかし、彼女に会う方法が一つあった。

彼女が消える間際に残した月の出来事。

都の遷都計画。夢の世界に月の住人を避難させる事。

私は博麗大結界に搭載された Red Magic を使って、疑似幻想郷を創り上げた。

ただ、そのまま現実のデータを使うと膨大な容量を使うため、自分の中の知覚、知識、経験から創出する形に変更した。そのため、曖昧な部分は霧がかってはつきり見えない形になる。さらに必要な人物を配置し、夢という形で私は創世界にダイブした。

やがて自分の都合のいい世界に私は溺れる。都合の悪い記憶は切り捨てる。

私は霊夢さんの裸身を見たことがない。

触手による陵辱は服を着たままで、昏睡状態だった時は、魔理沙さんが服を着替えさせたり、体を拭いたりした。魔理沙さんが直接霊夢さんの面倒を見させることは一度も

なかった。

「早苗」

霊夢さんの声がダブって聞こえる。

脛をゆつくりと開き、指の隙間から声のほうを見る。

三つの顔があつた。

自分是指で顔を覆ってはいなかった。

二神と巫女の顔。

八坂神奈子様と洩矢諏訪子様と、博麗霊夢さん。

「ようやく、目を覚ましたか」

神奈様こそそう言った。

「あの、私……」

「丸一年も眠ったままでぞ」と、心配げな顔で神奈様が言った。

「えっ！」

「こら、そういう顔で嘘は言わない」と、諏訪様は頬を膨らませた。

「あの実際はどれくらい……」

「三日だって」と、短く霊夢さんは私の問いに答えた。

どうやら、夢と現実の時間の流れはかなり異なっていたようだ。

「お前が来て、すぐに早苗は目覚めたが、何をしたんだ？」と、神奈子様。

「別に何もしてないわよ。ただタイミングが重なっただけだと思うんだけど……」

「一体何が原因で早苗が眠り姫になっちゃったんだ？」と、諏訪子様。

「たぶん私のせい」と霊夢が言う。「月の連中に夢を操る奴がいたのよ。あの事態を止めるのに少しちよつかいを出さざるを得なかったのよ。多分その時の最後っ屁ね」

「随分と曖昧だが……」

「あの時、私の側に早苗がいたからね。本人じゃなく、ねちっこく周りの人間にちよつかいを出すタイプなのよ」「……」

神奈子様は霊夢さんを訝しむように見つめる。

「あのー、皆さん一度部屋から出てもらえますか？ 着替えたいので」

寝間着姿の私は言った。

「ずっと、ええつと……ログイン？ ……のままだったから。ちよつと気になって来てみたの」

空は白い雲で覆われている。時折清涼感を感じさせる青空がのぞく。

「そしたら、あんたは昏睡状態……あれを使いすぎたら、こうなっちゃうのかと思ったわ」

「違います」

「まあね。私は早苗ほどアレの使い方知らないから、ちよつとね——」

「……」

「無事で良かったわ」

「霊夢さんはそれ以上詳しくは聞いてはこない。」

「知っているのか、それとも興味がないだけなのか。あるいは、血による勘なのか。」

「吐く息が白い。」

「空から白い雪がはらはらと舞い落ちる。」

「初雪ね」

「空を見上げ、霊夢さんが眩く。」

「あの霊夢さん」

「何?」

「霊夢は魔理沙さんの事が好き、なんですよね?」

「あんた、何言つて……」

「どうなんですか?」

「私は真顔で問う。」

「……………」

「……………」

しばし沈黙があつて――

「分かったわ」と、嘆息し観念したといった声を漏らす。

「私は魔理沙が好きよ」

その顔は夢の中の彼女と同じ顔のようで、同じようでもなく――

「そうですか……分かりました」

私は頬をぱんつと叩いた。

「はい、もう大丈夫です」

「? 早苗?」

と、早苗のお腹が空腹訴える声。

「霊夢さん、お腹空きませんか?」

「まあ――もうお昼だしね」

「じゃあ霊夢さん、おすすめの店紹介してくれませんか?」

代行による霊夢さんに対する醜聞はかなり収まってきている。

こちらが振りまいた言葉と霊夢さんのあつけらかなとした態度によることもあるの
だろう。

それでも……

仲良くご飯を食べているところを見せることも悪くはないだろうと……後付けの理由を考える。

「あんたねえ、さつき私にあんな事言わせといて——」と、霊夢さんの言葉が途切れた。

「……まあ、いいわ。こつちも色々とお願ひしたいこともあるし——」
ため息をこぼし、霊夢さんは呟いた。

もうすぐ十一月が終わり、十二月が始まろうとしていた。
了